「春は出会いと別れの季節」なんて言われているが一体誰が、そんなことを言ったのだろうか？きっとこの言葉を言った人はアインシュタインのような天才かもしれないひょっとしたらとても身近な人かもしれない。ソメイヨシノが満開に咲く頃僕は、彼女に出会った。

―二か月前―

「かなた～早く起きなさーい！今日は、入学式でしょ？」花粉に犯され岩のように重くなった身体を懸命に起こした。朝ごはんを味噌汁で流し、慣れない手つきでネクタイを結び、玄関で靴を履いた。革靴特有の底じきの硬さに違和感を覚えた。「いってきます」と言いこれから三年間通うであろう道に歩を進めた。「今日から高校生か…」第一志望の公立高校に落ちて滑り止めの私立に進学する現実を未だに受け止め切れていない彼にとって入学式は決して嬉しいイベントではなかった。河原に咲く桜でさえも門出をあざ笑っているように感じた。俯きがちに歩く視界の端で、真新しいローファーがいくつも通り過ぎていく。彼らの足取りは、まるで春の陽気に中てられたように軽やかだ。それが、重い鎧をまとっているかのような僕の心といっそうの対比をなしていた。

校門をくぐると、体育館の前で喧騒が渦巻いている。クラス分けの発表だ。人混みを避けるようにして自分の名前を探すと、一番端の「1年E組」にそれを見つけた。溜息をつき、逃げるように校舎へと入る。

教室に入り、指定された座席に座る。教卓の一番手前の席。皮肉にも、先生とマンツーマン授業を受けられる特等席だった。窓の外では風が吹くたび、薄紅色の花びらが雪のように舞い上がっている。

「……美しいのにね」

不意に、隣から鈴を転がすような声が聞こえた。

反射的に顔を上げると、そこには一人の少女が座っていた。陽光に透けるような茶色い髪と、意志の強そうな瞳。彼女は僕の視線に気づくと、いたずらっぽく微笑んで見せた。

「あの桜。あんなに美しく咲いているのに、君はさっきから表情が暗いままだもん。まるで、明日世界が滅んじゃいそうな顔をしてる」

「……別に。ただ、眩しいだけだ」

僕はぶっきらぼうに言い返し、再び窓の外へ視線を投げた。初対面の相手に、第一志望に落ちた未練を抱えているなんて言えるはずもない。けれど彼女は、僕の冷淡な態度を気にする様子もなく、さらに言葉を重ねた。

「かの有名な天才物理学者のアインシュタインは言ったわ。『困難の中に、チャンスがある』って。もしここが君の望んだ場所じゃなかったとしても、ここでしか出会えない何かが、きっとあると思うな」

まるで自分の心の中を見透かしているような感じがして少し気味が悪いと感じつつ隣を見ると、彼女は膝を組んで、満開の桜を指差した。

「私は暁。糸川暁。糸口の糸に天の川の川、春暁の暁で糸川暁！君の名前は？」

硬い革靴の違和感も、花粉で重かった頭の芯も、彼女のまっすぐな視線に射抜かれた瞬間にふわりと消えた気がした。

「……かなた。種子島 かなた」

「春は出会いと別れの季節」。

その言葉の半分、すなわち「出会い」の本当の意味を、僕はまだ知らなかった。けれど、窓から入り込んだ一陣の風が彼女の香りを運んできたとき、止まっていた僕の時計の秒針が、確かに動き出した音がした。

入学式から一週間。放課後の教室は、部活の勧誘に走る先輩たちと、新しい居場所を探す新入生たちの熱気で溢れていた。けれど、僕は相変わらず「ここではないどこか」を探すように、屋上へと続く非常階段の踊り場に座り込んでいた。

「またそんな顔をしてる。せっかくのイケメンが台無しになるよ」

階段の上から、暁がひょいと顔を出した。彼女は僕の隣に迷いなく腰を下ろすと、手にしたメロンパンを半分に割って差し出してきた。

「暁……。部活、入らないのか？」

「ピンとくるものがなくて。かなたこそ、文芸部とか天文部とか、興味ないの？」

僕は黙って首を振った。今の僕には、伝統ある部活動の輪に入る勇気も気力もなかった。人間強度が下がるからだ。

その時だった。

――キィィィィィン、という、鼓膜を直接針で刺すような高音が響いた。

「……何、今の音」

二人は顔を見合わせ、反射的に窓の外を仰いだ。

校舎の裏手、裏山の杉林の真上に、それはいた。

夕日に焼けてオレンジ色に染まった空。そこに、物理法則を無視したような動きで静止する「銀色の歪み」があった。円盤と呼ぶにはあまりに不規則で、まるで空間そのものが熱で溶け出したかのような形をしている。

「……UFO？」

僕が呟いた瞬間、その物体は激しい光を放ち、ジグザグな軌道を描いて山の向こう側へと消えた。あとに残ったのは、網膜に焼き付いた白い残像と、不自然なほどの静寂だけだった。

「見た……よね？」

暁の声が震えている。恐怖ではなく、純粋な興奮で。彼女の瞳は、入学式の時よりもずっと強く輝いていた。

「かなた、今の見た？UFOよ！やっぱり宇宙人って実在するんだわ！ ねぇ、かなた。聞いてるの？」

彼女は、立ち上がり、僕の手を強く引いた。

「私たちで突き止めようよ。この学校の空で、何が起きているのか。教科書に載っている星座を眺めるだけじゃ物足りないわ」
「突き止めるって……どうやって」
「決まってるじゃない。部活を作るのよ。名前はそうね――」
彼女はペンを取り出し、踊り場の壁（もちろん後で消すつもりだろうが）に力強く書き殴った。
『未確認生物観測部（通称：UCクラブ）』
「既存の法則に囚われない、私たちだけの宇宙を探す場所。これなら、君の居場所としても悪くないでしょ？」
「UCクラブ」。あまりに突飛で、あまりに不確かな目的地。
けれど、彼女に手を引かれて駆け下りる階段の振動が、僕の足に馴染まなかった革靴の感覚を、心地よい高鳴りへと変えていった。